**分類　自然体験（生き物・みどり）**

## 題名　リズム感ある童謡を味わい、自然の恵みに感謝しよう

### １．学習のねらい

私たち人間は古来より自然に生かされてきましたが、便利で快適な生活を追求するあまり、身の回りの自然環境に対し、その有難さを忘れがちです。人と自然との共生を目指し、環境保全活動を推進していくためには、幼い頃から自然への慈しみや感謝の気持ちを育んでおかなければなりません。そこで、子どもの頃の感性により、純粋でやさしい心で自然の営みを詠んだ詩を鑑賞したり、自然に関わる詩を書いたりすることにより、自然の恵みを感じ取り、環境を多面的・多角的に見つめる感性を養います。

### ２．実施について

（１）実施時期：１年を通して可能　　（２）実施場所：普通教室
（３）指導時数：１時間（国語の発展学習）　　（４）指導対象：中学年以上が望ましい。

### ３．準備するもの

（１）資料（金子みすゞさんの作品４点）
（２）原稿用紙（鑑賞後の感想文や「生き物・みどり」をテーマとした詩を書くため。）

### ４．学習の進め方

（１）資料の金子みすゞさんの作品①～④を板書し、読み聞かせます。
（２）クラスを４グループに分け、それぞれ１つを選択して自分たちで鑑賞します。
（３）各自、みすゞさんが思う気持ちと、自分の感じたことを作文にします。
（４）グループ内で発表し合い、それぞれ共通する事柄をまとめ、クラス全体で発表します。
（５）環境をみつめる視点・感性として、優れた感想があれば、評価してやるとともに全体で共有します。生命の循環、自然の営み、食物連鎖や生物多様性、自然の恵みや自然界における生き物・みどりの相互作用､そして小さな生き物も地球環境につながっていることなど、子どもなりの感覚で感じ取ってもらいます。

### ５．指導上の工夫・留意点

（１）金子みすゞさんは明治36（1903）年山口県に生まれ、大正から昭和初期に優れた作品を発表、若き童謡詩人の巨星と称されながら26歳で亡くなっています。本プログラムで採り上げる彼女の詩は、金子みすゞ著作保存会の了承を得て掲載しています。転載される場合は、必ず「金子みすゞ著作保存会」（連絡先は70頁）の許可を得てください。
（２）彼女の作品『わたしと小鳥とすずと』は、国語の教科書で採り上げられています。子どもたちには、必ず作られた頃の時代背景を説明してあげてください。作品には、環境教育に大切な視点が隠されています。じっくり味わい、環境を見つめる力を養います。
（３）そのほか、国語の教科書にも採り上げられている工藤直子さんの『のはらうた』の作品をいくつか鑑賞し、「生き物・みどり」をテーマとして野原の虫や花、雲や川になったつもりで自然のすばらしさを詩に表現するのもよいでしょう。トピックを参照してください。

## ① 木

お花がちって
実がうれて、
その実が落ちて
葉が落ちて、
それから芽が出て
花がさく。
そうして何べん
まわったら、
この木はご用が
すむかしら。

**解釈の例**

○いのちの営みを想いえがき、生命循環の大切さを学び取ります。

・人は疲れたら横になって休めますが、木は少々暑くても寒くても疲れても、その場に立っています。

・花を咲かせ、実をみのらせ、やがて、実を落とし、わずかなものが、子孫を増やしていきます。

・黙々と繰り返される木の営みに驚き、偉大さを感じつつ、その恵みに感謝します。

・休の字は人と木でできているように、酸素と二酸化炭素のやりとり等をもとに世代を超えて共生しています。

・木の営みの一つ一つを考えれば、自然を改造してきた人間こそが、周りの環境に気を配っていかなければならないことに気づきます。

## ② はちと神さま

はちはお花のなかに、
お花はお庭のなかに、
お庭は土べいのなかに、
土べいは町のなかに、
町は日本のなかに、
日本は世界のなかに、
世界は神さまのなかに。
そうして、そうして、神さまは、
小ちゃ なはちのなかに。

**解釈の例**

○小さな生き物も、地球環境につながっていることを、子どもなりに感じとります。

・蜂から花、花から庭、庭から町、町から日本へ世界へ神様へと、そして、神様が蜂へと、みごとな世界観、自然観、宇宙観です。

・一輪の花にも一匹の虫にも同じ命が宿っています。人間も同様で、それが世界の一部として微妙なバランスの上に成り立っています。

・蜂のいる花を学校園で栽培しているもので考えてみます。花のつくりは、とてもみごとで、その不思議さに驚かされます。ひまわりや菜の花、落花生、綿などは油の実をつけ、感動です。

・これらの命の躍動が延々と繰り返されていることに、生命の大切さを感じとります。

・自然の中でみんなが助け合って生きているすばらしさに感謝しつつ生きて行きたいものです。

## ③ 土

こッつん　こッつん
ぶたれる土は
よいはたけになって
よい麦生むよ。

朝からばんまで
ふまれる土は
よいみちになって
車を通すよ。

ぶたれぬ土は
ふまれぬ土は
いらない土か。

いえいえそれは
名のない草の
おやどをするよ。

## ④ 土と草

かあさん知らぬ
草の子を、
なん千万の
草の子を、
土はひとりで
育てます。

草があおあお
しげったら、
土はかくれて
しまうのに。

**解釈の例**

○ともに、自然界における生き物・みどりの相互作用について理解します。そして、生物の多様性につながる自然の豊かさと、その大切さを学び取ります。

・目の前にあるものは覚えていても、目にすることが少ないものは忘れがちです。とくに、土や草というものは気にとめることが少ない方です。

・これらの詩を読むと、世の中には無用なものが全くないことがわかります。すべてのものの存在がよいのです。

・土は草木を育て、その草木が大気を浄化し、酸素をつくってくれます。

・土そして草木は、水を浄化してくれます。

・草には、草を食べる虫がやってきて、それから、その虫を食べる虫などがやってきて、やがて死んで土に帰って行きます。

・このように、すべての存在がよいのです。まわりのすべてに、いてくれるありがたさを感謝したいものです。

・私たち人間は周りのすべてのものが延々と生きていけるよう、配慮しなければならない立場にいるのです。

## ６．参考資料

（１）文献『金子みすゞ童謡集「わたしと小鳥とすずと」』矢崎節夫選（1984年）JULA出版局
（２）ホームページ『金子みすゞ記念館』http://www.city.nagato.yamaguchi.jp/misuzu/
＜連絡先＞　〒171-0033　東京都豊島区高田３-３-22　JULA出版局内
「金子みすゞ著作保存会」TEL.03-3200-7795　FAX.03-3200-7728